

「愛顔(えがお)あふれる愛媛づくり」

平成26年度「知事とみんなの愛顔(えがお)でトーク」知事講話

開催日時：26.5.19(月)

開催場所：弓削地域交流センター

今年度の「知事とみんなの愛顔でトーク」、今日は上島会場での開催となりましたけれども、皆さんそれぞれお忙しい立場だと思えますが、御出席をいただきまして誠にありがとうございます。

こういう機会というのが、この会合そのものが目的ではありませんけれども、せっかくのチャンスでありますから、その地域に伝わっている文化であるとか、施設であるとか、状況を視察するのも、その後の政策展開に非常に重要な意味を持っているということを感じています。今日もこちらに来てから大三島のほうでいろんな事業を見させていただきましたし、生名島では、全然知りませんでしたけれども、麻生イトさんの足跡を刻んだ三秀園という名勝のほうにも足を運ばせていただき、まだまだ知らない魅力というものがいろいろあるんだなということを改めて痛感しているところでございます。今日は皆さん、それぞれの立場でいろんな御意見を頂戴することになるかと思えますけれども、私のほうから報告というか、感じていることについて少しお話をさせていただきたいと思えます。

【瀬戸内しまのわ2014及び県内のマラソンイベント】

この数カ月間は何かと島の方に足を運ばせていただく機会が多くなってまいりました。それは、2年前から準備をしてきた広島県と共同で開催している「瀬戸内しまのわ2014」が本格的な年を迎えたということがありますけれども、それ以前に、土台というものを自分の目で確かめたいという気持ちもございました。もちろん、しまのわのイベントが中心になるんですが、例えば、昨年ここで生名マラソンの話が話題になりましたし、是非これは島の活性化のためにも、昔から準備はされていたと聞いておりますけれども、ハーフマラソンというコースを加えていってはどうかというやりとりがございました。まさかその半年後にハーフマラソン大会が実際に実施に移されるとは、当時思いもよらなかったんですけども、半年後に関係者の皆さんが頑張っ、初めてのハーフマラソン大会が生名島と佐島と弓削島を結ぶ新しい設定のもとで開催されました。

過去最大の500人近い参加をいただいたということだったんですけども、関係者のほうから、「そういう話をしたんだからあなたも出なさいよ」ということで走らせていただきました。今回は初めてのことで、500人ということだったと思えますけれども、正直言ってこの美しさ、そしておもてなしの熟成を高めていくことによって、2倍にも3倍にも膨れ上がっていく可能性を感じました。その翌月に行われております南予の松野町では、桃源郷マラソンというのがその町の本当に大きな大事な年中行事の一つになっておりまして、松野町の人口は4,300人ぐらいだと思いますが、その町のマラソンイベントに毎年参加者が3,600人いらっしゃいます。ほぼ町民に匹敵するだけの方々が町内にお越しになって、桃源郷マラソンを走られるんですけども、これは何もその1日だけのことでなくて、そのマラソンへの参加を通じて、地元の1次製品の顧客になっていただくという

ことにもつながる、そしてまた、口コミによるその地域のPRというものが、ある意味では無償のボランティアで実施していただける、様々な広がりというものをその町に与えていくことになりました。生名のマラソン関係者にも是非桃源郷を1回のぞいてみてはどうかという声を掛けたんですが、この4月の桃源郷マラソン、こちらも参加してきたんですが、生名の関係者の皆さんが視察にお越しになられていたので、随分と参考にされたのではなかろうかと思えます。

いずれにいたしましても、この生名の橋のハーフマラソンコースというのは県内にありませんし、ちょうど愛媛マラソンが2月、3月に生名マラソン、4月に松野町の桃源郷マラソン、そして5月に西予市野村町の朝霧湖マラソンと、うまく1カ月単位でずれているんですね。カレンダー的に見てもこの生名マラソンというのはすごく可能性を秘めたものに今後育っていくのではないかということを実感いたしました。

また、しまのわ2014が始まってからは、いろんな皆さんの手作りイベントがどんなものかというのを是非拝見したかったので、一部行かせていただきましたけども、しまのわ2014そのもののコンセプトが、何も島博覧会だからといってお金を掛けて大きな建物を建てるというようなことではなくて、それぞれの島には個性があります、その個性というものを全面に打ち出して、磨いていこう、そしてつなぎ合わせていこうというのが趣旨であります。もちろん時折、全国的な知名度をアップするために大きなイベントも挟んでいきますけども、主役はあくまでも島民の皆さんがそれぞれ企画する自主企画イベントにありまして、それは本当に小さい単位のものもあれば、中規模の単位のものもありますけども、なるほど島ならではの企画がいろいろとあることを実感します。愛媛側だけで、この半年間の自主企画イベントは約70を数えます。広島側が120ぐらいでしょうか。全部で200近いイベントが、小さなものから大きなものまで実施に移されることとなります。来月大三島の大山祇神社のほうで市川海老蔵さんをお招きするしまなみ歌舞伎なんかは、全国規模のPRになると思います。

【自転車を活用した観光振興】

また、3年間かけて仕掛けをしてきた自転車を活用した新しい観光振興策につきましては、10月26日にしまなみ海道を使って世界中からサイクリストが集う大きな仕掛けにつなげていきたいと思っています。特にサイクリングというのは新しい分野でありますけども、確実にこれからマラソンの後追いをするかのようになり、全国的なブームになることは間違いないと思いますし、10月26日の世界的なイベントで好感触を得た場合は、参加者がそれぞれの地域に戻ってPR活動に入っていきますので、まさに世界のアマチュアサイクリストの聖地としてしまなみエリアというものが位置付けられる、ということは、すなわち、その後の日常の観光客の誘客につながっていくということだと思います。放っておけば来るだけで通過してしまいます。問題は来た人たちをどう引き込むか、それがこの自主企画イベント等を含めて、それぞれの島でいろいろと考えていく題材になってくると思います。いずれにしましても、人が来なければ活性化のチャンスは訪れないということでもありますから、その方々が満足し、リピーターになる、あるいは知り合いにPRをしていただくということによって、訪れる人たちというのはどんどん増えていく、活性化に結びついていくということでもありますから、そんなきっかけができればなと思っています。

先月はインドネシアからの訪問団を60名ばかり迎えましたけども、今治のしまなみ海

道、そして翌日は上島のゆめしま海道をすべて走っていただきましたが、本当に大満足して帰って行かれました。10月26日には最低100人のツアーを組むという約束をいただきましたし、また台湾からは既に日常のツアーの中でしまなみとゆめしまのサイクリングツアーというものが定番化し始めています。また先般ヨーロッパのほうを回ってきたんですけども、こちらはサイクリングのメッカでありますから、特にスイスあたりでは、「これどうやって行けばいいんだ」というような問い合わせが続々と押し寄せてまいりました。それ程このエリアの景観というものが、世界に通じるものであるというあかしであろうと思います。

ちなみに、例えばスイスというのは、僕も行くまでわからなかったんですけども、今、日本の一人当たりの総生産、GDPと言いますけども、ドル換算で3万8千ドルという位置付けになっています。これは世界の順位で言いますと、大体今世界190か国ぐらいあると思いますが、24番目ぐらいであります。1985年には実は日本が1位だったわけありますけども、その後の低成長の中で24番目ぐらいになっています。アジアでは日本の3万8千ドルに対しまして、シンガポールが5万5千ドル、そして今回売り込みに行ったスイスが8万1千ドル、日本の一人当たりの総収入、総所得の2倍以上のレベルです。もちろんそれに匹敵して物価が高いですから、所得が高くても国内で生活するのは大変であります。しかし、海外には誰でも出られるという所得を持っているということにもなりますので、こうしたところをピンポイントで狙って誘客を考えていくというのも、今後中長期的には、地方にいながらの大きな戦略になっていくのではなかろうかと思えます。

【上島町及び今治市の魅力】

また、4月には岩城島の桜まつりのほうに行かせていただきました。噂では聞いていたんですが、実は今年の3月発売の週刊誌をパラパラめくっていましたが、日本の10大桜の名所というカラーグラビアが登場しまして、その中の一つに岩城の桜が大きな写真とともに掲載されていました。いわば、県外で非常に有名だということでもあります。この桜、地元の方に聞きますと、70年ぐらい前から地元の人が毎年毎年植樹をして増やし続け、現在では3千本、実際には4千本近くになっているんじゃないかと言われていましたけども、その山一面に咲き乱れる桜の姿は圧巻でありました。ずっと回ってみて、登山、トレッキングと兼ねて県外の方が多数いらっしゃることに驚きました。駐車場のナンバーを見てみると、8割以上が県外のナンバーでありました。おそらく県内の方、例えば人口の多い松山とか、そういう所にはまだ全く情報が発信されていないのかなと感じましたので、こういったところにもいくらでも伸び代があるなということを感じたのが、この岩城の桜まつりでもございました。

また、その後、自主企画イベントの一つでありますけども、伯方の島の食材を活用したグルメの取組み、そしてまた、大島では鯛の餌やり体験、このような現場を見させていただきましたけども、それぞれ感動したものについては、ちょっとプライベートな話になりますが、自分自身も持っているラジオ番組で一つ一つ紹介をさせていただいていますので、多少それを聞いた人の誘客につながっている面もあるかもしれません。どれも都市部では全く経験できない、島では当たり前、そういったものが非常に多くあることに気付かされる思いでございます。まさに自然の中の非日常を体験していただくのが島博の大きなテーマでもありますので、その期待に十分応え得るコンテンツが揃っていると痛感していると

ころでございます。

また、今治といえばやはりタオルでありますけども、タオルは非常に好調でございまして、その品質の高さというものは広く全国に、そしてまた最近では海外へと名を広めている最中でありまして、東京では青山という中心部、そしてまたスカイツリー、あるいはグランドパレス東京という新しい最新鋭のホテル、ここに専門ショップが出ていますけども、こちらでも予想の1.5倍の売り上げをはじき出すという好調ぶり、そしてまたおしゃれな街には続々とタオル専門ショップが増え続けている状況でありまして、先週も東京のタオル関係のショップを拝見させていただきましたが、特に若い女性の方々が大きな顧客のターゲットというか、お客さんの中心になっています。いわば、大事な赤ちゃんを包む愛情の表現として、今治タオルを選択するという層が急速に拡大しているんだなということを感じてしまいました。そういったしなみ、そして今治、上島に注目が集まっているこういう時に、鉄は熱いうちに打てといえますから、さまざまな仕掛けをすることが大事な課題になっているのではないかと思います。

【「瀬戸内海賊物語」による地域のPR】

運というものは、いい時は本当にうまく転がっていくものであります。今月の末から「瀬戸内海賊物語」という映画が全国上映されることになっていきますけども、ちょっと出席の方で「瀬戸内海賊物語」を知っている方を挙げてください。けっこういないんですね。地元のことなんですけどね。簡単に言うと、瀬戸内のある島が舞台なんです。どこの県というふうにはなっていないんですがある島、早く愛媛県にしちゃえと思ってるんですけど、ある島を舞台にしてそのフェリーが廃船になるという課題が浮上するんです。それを何とかしようと島の子どもたちが立ち上がるんですね、でもお金がない。そこで目を付けたのが、能島村上水軍、村上武吉がどこかに財宝を隠しているというふうな伝説を知り、子どもたちが冒険をしながらそれを探しに行くというのがテーマになっているんですけども、現代のシーンと村上武吉が活躍した戦国時代と両方の場面が交互に出てくるような、非常に面白い内容になっている映画でありました。

その映画の上映の直前に、またいい運命の転がり、御案内のとおり、本屋大賞で「村上海賊の娘」が今年を受賞をしたというニュースが飛び込んでまいりました。こちらのほうの図書、「村上海賊の娘」を読まれた方？えっ、意外と少ないんですね。後ろの今日御出席の皆さんで読まれた方いらっしゃいますでしょうか？えっ、ゼロ？やはりこのエリアの皆さん、是非目を通していただきたいなと思うのは、恐らくこの本屋大賞になると、やがてドラマ化か映画化、映像化されるんですよ。これ面白いですから必ずブームになります。ブームにならなかつたら嘘つきになっちゃいますけども、内容的にいても絶対ブームになると思いました。ブームになったら人が来るようになりますね。その時に多少の説明ができたほうがいいじゃないですか。長いのでちょっとしんどいところもあるかも知れませんが、地元にはゆかりの作品ですから、是非関心を持っていただけたらなと思います。

かいつまんで言うと、時代は戦国時代で、織田信長が全国制覇に向かって歩を進めている最中に起こる時代の話なんですけども、その信長の前に立ち上がったのが一向宗という一つの宗門でありました。その戦いが続く中で、大阪あたりの木津川という川沿いに一向宗が籠もるんです。そのの砦に一向宗の関係者が立て籠もるんですね。信長が陸路を全部押さえて兵糧攻めにします。後ろには海が控えていますから、後は海路を押さえれば

兵糧攻めが完了するというので、その海路を絶つために大阪の堺市あたりに根城を持っていた泉州海賊を味方につけるわけなんです。立て籠もっていた一向宗は、それに対抗するため、中国の覇者である毛利に救いを求めます。毛利家はその時、まさにここ、因島、能島、来島の三島村上に助勢を頼むんですけども、それぞれの思いは別でありましたけども、最終的には一致結束して海路を使って兵糧を運び、それを維持するというので立ち上がっていくわけでありまして。千隻の船が瀬戸内海のこの辺りから出発して、木津川に向かって行くんですけども、ある特別な思いを持っての出陣でした。上杉謙信立たずして勝機なしということで、立たない時は帰ってくるという、最初からそういう戦略を持って出陣していくんですけども、結局謙信が立たないので、にらみ合いの末、村上水軍は戻ってくるんですね。ところが、戻ると言うことは木津川に集結している人たちを見殺しにするということでもありますから、それを良しとせずと一人立ち上がったのが村上武吉の娘の景姫(きょうひめ)という主人公になります。景姫は一人で身を投げて泉州海賊に戦いを挑んでいくんですけども、その事実を知っていたのは弟でありました。弟は姉への思いを断ち切れずに、帰路に着く水軍全員に向かって叫びます。村上海賊の中でたった一人泉州海賊に戦いを挑んだ者あり、その名こそ能島村上水軍の頭領、村上武吉の娘にして我が姉景姫である、こう水軍の連中に呼びかけるんですね。水軍たちがその瞬間、全員が獣と化して舳先を翻して景姫の救出に向かって挑んでいくという、こんなあらすじであります。どうなったかは小説を読んでいただきたいと思います。

ただ、思ったんですけど、泉州海賊というのは大阪の堺市あたり、こちら側は今治中心の場所ですね。考えてみたら両方とも今タオルの産地で、タオル戦争してるんですよ。泉州タオル対今治タオル、時代が変わっても同じことを感じるなということを読みながら思いましたけども、このような、ここを舞台としたドラマができたとするならば、大きな大きなチャンスにもなりますし、またそうなるように全力で僕も仕掛けをしていきたいと思っています。

以上、雑駁ではありましたが、島の魅力というものを感じたままに皆さんに御報告することで、最初の皮切りの御挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。